

氏名（本籍）	横 ^{ヨコ} 谷 ^ヤ 奈 ^ナ 歩 ^ホ （東京都）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第212号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉日常／異界／境界 〈論文〉日常／異界／境界

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部）	檀田伸也
（論文第1副査）	〃	准教授（ 〃 ）	布施英利
（作品第1副査）	〃	教授（ 〃 ）	佐藤一郎
（副査）	〃	〃（ 〃 ）	坂口寛敏
（ 〃 ）	〃	准教授（ 〃 ）	小山穂太郎

（論文内容の要旨）

本論文〔日常／異界／境界〕は、わたしたちが生きているこの「日常」と、日常と異なる世界である「異界」と、そして日常と異界のあいだにある「境界」の3つの場所にまつわる58の証言と論考からなる。論文の著述に関しては、本論文の著者である〔私〕が、本来の論者であるはずの〔横谷奈歩〕を、あえて第三者として扱うという形式をとった。つまり、著者＝〔私〕が、〔横谷奈歩〕とその作品について論じたのである。理由は、本論文が自作〔→横谷奈歩の作品〕の解説書になることを避けるためであり、また、作者の存在をなるべく透明にすることで、より伝わりやすい内容にするためであり、そして、論文を書く横谷奈歩に対し、制作者である横谷奈歩としての抵抗、そして位置づけを明確にするためである。この著述形式の下、本論文は、各エピソードによる証言の部分と、それらを基にした「検証行為」による論考の部分で構成される。証言とは、異界へと誘い出すためのモチーフである。検証行為とは、「記憶をひとつずつ思い出し、書き出し、潰して行くこと」であり、さらに「それを現実世界の出来事とすりあわせ、関連づけて行くこと」である。

まず証言においては、各エピソードの主体となった人間、カメラ、猫など、さまざまなものが〔私〕に代わって証言する。それぞれの話は、1話ずつ完結しながらも相互の関連性を暗示しつつ進行していく。それは、この論文のタイトルになっている日常、異界、境界のそれぞれの世界はそこら中に潜んでおり、それらが絡み合い、同時進行しながら今この世界が成り立っているということを示唆している。

次に論考では、横谷の制作の大きなテーマである「日常のなかに含まれる、ふと足を踏み入れてしまったような、非日常なる場所、異界」に関して、初期の水平線絵画シリーズと久高島でのニライカナイの概念との出会いに基づきながら論じる。次に、横谷が過去に、国内を中心に海外も含めた第二次大戦の戦地や地図から抹消されていた島、人間魚雷基地跡地、東村山のハンセン病療養所、富士の樹海などを訪ね、そこに広がる「何の変哲もない風景」を撮影した体験から、場についての考察をした。それらの土地が抱えた歴史、出来事によって、見た目にはわからないかのような変化を遂げてしまったその場所に、重い時間の流れと人々の記憶や想念がさらに積み重なって、それらの土地は今現在、独特の空気の漂う、非常に強い力を秘めた場所になっている。横谷がひきつけられたのは、「この世界（日常世界）と異界（非日常世界）との接点、出入り口」にあたるかのような場所に他ならなかった。それらの場にまつわる証言を基に、以下の例を含むあらゆる側面から、それぞれの場所〔日常／異界／境界〕について検証した。

- ・小塚原刑場跡、戦没者慰霊碑の付近を歩いたときに感じた場の「におい」
- ・アウシュヴィッツを訪問した時に身体に感じた「自分が潰されてしまうような」体験
- ・伊勢神宮で古代から行われている行事「式年遷宮」と場の関係
- ・その場に人の想念が寄り集まって形成された、目に見えないある空気
- ・占いやイタコ、新興宗教を例に出し、人々の寄せる「見えないものへの信頼」
- ・場所や自然の闇や隙に対する人々の想像力と作品への心理的な影響力
- ・何が作品になりうるのかーアウシュヴィッツ第一収容所と第二収容所の見せ方の違い
- ・時間と異界との関係ー明け六つの鐘の話为例として
- ・狂気を表現している芸術作品を例に、異界へと引きずり込む人間の狂気
- ・正気と狂気は表裏一体ー人間の狂気と精神医学の点からの意味づけを参考にしながら
- ・狂気の感じる気配と、気配のある空間、不在の空間を作品化する横谷の目的
- ・横谷奈歩の近作3点を制作メモより読み解く

以上の検証より、「日常と非日常のリアルな境界面を作り、鑑賞者に体験させることによって、積極的に身体と、我々が自我と呼ぶものを剥離させる経験を作品の中で出来る装置を作りたいのだろうか。だとしたら不特定多数の人が観る（体験する）であろう美術作品に於いてそれを実行するのは、あまりにも無責任で、危険な試みである。」という疑問を「私」が投げかけながらも、そうではないと打ち消した。

「自分が持つ意識が非現実（異界）の作品空間から、外の現実空間に、元の意識に戻って来た時に、より敏感に感じられたであろう自分の意識なるものが身体と一致し、安堵感を得る。そして、また前に進もうという意志が生まれることを、自身が既に各地で体験し、そのような装置を作品として自分の力で表現したいと試みているのではないだろうか。どのような人も入り込めるだけの「異界の気配」を作り出そうとしているのではないだろうか。」という結論を導き出した。

そして、最後の証言のなかで、論文を書いた「私」が「横谷奈歩」へと向けた言葉を遺し、あとがきの中で、「横谷奈歩」は再び一人称に戻り、結びとした。